

第2章

京田辺市の現状と福祉課題

第1節 地域類型

1. なぜ地域類型をするのか

第1次活動計画でも述べられていたように、生活問題の傾向をつかんだり、地域福祉活動の進め方を検討するためには、地域間の違いに配慮した活動展開を検討したり、同じ類型に属する地域の取り組みを分析することが必要です。

また、地域の特徴を社会福祉協議会が把握しておくことで、ニーズに基づいた支援ができるだけでなく、それぞれの地域が今後直面するであろう課題に先手を打ってアプローチすることも可能になります。

さらに、地域に働きかけを行う際にも、客観的なデータに基づいて必要な活動の説明をしていく方が、住民にもわかりやすく主体性を引き出すにも有効であると考えられます。

2. 地域類型化の手順と指標

第1次活動計画では、(a)1985年以降の世帯数の増加率、(b)共同住宅率、(c)農業従事者の割合に基づき、(Ⅰ)農山村地域、(Ⅱ)府営田辺団地、(Ⅲ)新興住宅地域、(Ⅳ)旧村と新興住宅地の混合地域の4つの類型を設定し、それぞれの地域の特徴を把握しました。これらの分類は、5年を経た現在でも有効なもので、今後も地域福祉の推進の資料として活用していくことが可能です。

そこで、今回は別な指標に基づいて、地域福祉推進の指標となり得るような分類を試みました。今回、分類に使用したのは自治会ごとの「人口構成比」と「世帯構成比」、そして2007年以降5年間の「人口の増減」という指標です。人口の構成比は、年少人口（14歳未満）、生産年齢人口（15歳～64歳）、高齢人口（65歳以上）の比率、世帯構成比は、「独居」及び「三世帯」世帯の比率、人口の増減は、全体の人口とともにそれぞれの人口区分における増減に主に着目しました。

3. 人口構成比及び世帯構成比に着目した地域分類

I. 三世代同居率が高く高齢化率も高い地域

【特徴】第Ⅰの類型は、「三世代同居率が高くかつ高齢化率も高い地域」です。これらの地域は三世代同居率が高く、高齢化率も高いという特徴があります。この類型に分類される地域は、第1次活動計画の分類で「農山村地域」に分類された自治会とほぼ同一の構成になっています。地域のつながりなどが強く残る地域であることから、こうした強みを生かした地域活動の支援が必要になります。

Ⅱ 三世代同居率が低く高齢化率が高い地域

【特徴】第Ⅱの類型は、「三世代同居率が低く高齢化率が高い地域」です。ただし、このグループは、その中でも三世代同居率が比較的高い自治会（出垣内、多々羅、江津）、同じ三世代同居が低い自治会でも独居の割合の高い自治会（同志社住宅、府営団地、新興戸、東住宅）と三世代同居も独居の割合も低い自治会（松井ヶ丘、大住ヶ丘）に分かれています。それぞれの特性に合った地域活動の支援が求められますが、Ⅰの類型と比べると家族に頼れない人の多い地域であることから、地域のつながりを強め、助け合いの活動などを積極的に働きかけていくことが必要になります。

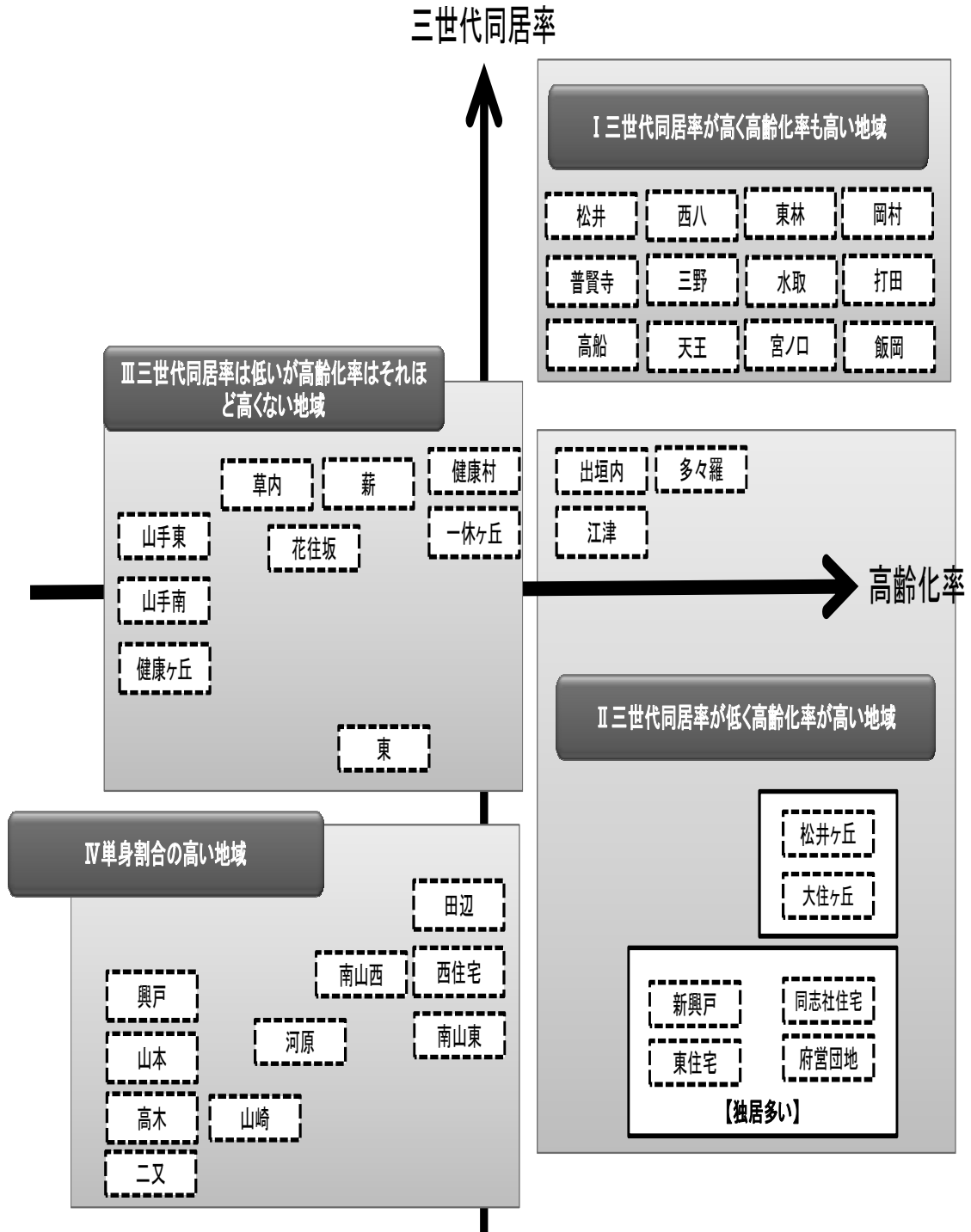
Ⅲ 三世代同居率は低いが高齢化率はそれほど高くない地域

【特徴】第Ⅲの類型は、「三世代同居率は低いが高齢化がそれほど進んでいない地域」です。この類型の中では、三世代同居率が比較的高い自治会（健康村、一休ヶ丘、薪、草内、花往坂）と、そうでない自治会（山手東、山手南、健康ヶ丘、東）や高齢化の進展に多少の差はみられるものの、大まかには三世代同居率が低く、高齢化もまだそれほど進んでいないという点で共通しています。これらの地域では、まだ大きな問題が顕在化していない自治会が多いと思われませんが、だからこそ、これからの高齢化を見据え、長期的な視点で人材育成や活動支援を行うことが必要になります。

Ⅳ 単身世帯の多い地域

【特徴】第Ⅳの類型は、「単身世帯の多い地域」です。「大学のまち」としての特徴から、学生アパート・マンションのあるエリアが含まれる自治会は、単身者の割合が多くなると考えられます。特に、興戸、山本、高木、二又といった自治会は単身者の割合が顕著に高くなっています。単身者が多いとはいえ、多くは大学生であり、また学生の多くは短いサイクルで転居していきます。こうした学生たちを地域活動の担い手として考えることは現実的ではないかもしれません。一方、単身者が目立つとはいえ、子育てしている世代や高齢者が多く住んでいることも事実です。見せかけの数字に惑わされず地域ニーズを把握し、活動を展開していくことが必要だといえます。

図 1 人口構成比及び世帯構成比に着目した地域分類



4. 人口の増減に着目した地域類型

I. 14歳未満人口の増加が顕著な地域

第Iの類型は、14歳未満人口の増加が顕著な地域です。この類型には、健康ヶ丘、一休ヶ丘、田辺、興戸、高木、薪、江津、山本等が当てはまります。全国的に人口減少が進む中で、これらの地域では人口が増加し、さらに年少人口が増加している自治会になります。流入人口が多いことも予想されるため、こうした人と地域のつながりや参加をどのように図っていくのかが重要になる地域と考えられます。また、地域とのつながりのない子育て世代等が多いことが予想され、子育て支援の活動等も求められることが予想されます。

II 人口がやや増加している地域

第IIの類型は、人口がやや増加している自治会のグループです。しかし、あまり大きな変化はなく、その中でも比較的若い世代も増えている自治会（松井、山手東、二又、同志社住宅、出垣内、南山西、山崎、河原）とどちらかといえば高齢者が増加している自治会（草内、山手南、多々羅、南山東）があります。今後、人口が減少に転じるか、緩やかに増加を続けるかは自治会の状況によって異なると考えられますが、特に高齢者が増加している自治会では人口減少に転じ、IIIの類型になっていく自治会も増えていくと思われま

III 人口がやや減少している地域

第IIIの類型は、この5年間で人口が緩やかに減少している自治会のグループです。これらのグループでは大きな変化はないものの人口がやや減少しています。その中でも西八と飯岡は、年少人口が若干増加しているという珍しい動きをしていますが、高齢者の人口は増加している点で共通しています。人口が減少しているということは、流入人口が少ないことを意味しており、徐々に高齢化が進んでいくことは間違いないでしょう。先を見越した働きかけが必要になる地域です。

IV 人口が減少し、高齢者が増加している地域

第IVの類型は、人口が減少しかつ高齢者が増加している自治会です。また同時にこのグループの自治会は、人口が多いことも特徴です。特にこの5年間で、人口が減少し、高齢者数が増加したのは、東住宅、府営住宅、大住ヶ丘です。松井ヶ丘では、年少人口も若干増加しましたが、生産年齢人口の減少が顕著でした。こうした地域では流入人口が少ないため、開発といった大きな居住環境の変化がない限り、5年後にはさらに高齢化が進むことが間違いないといえるでしょう。比較的元気な高齢者が多い間に、地域の様々な活動の土台をつくっておくことが必要な地域といえます。

図 2 人口の増減に着目した地域類型

